大空に平和願う

ピースクラブニュース

未来を担う子どもたちが平和の尊さや戦争の恐ろしさ、もたらす悲劇などについて学び、考え、自分の意見を述べ合うことを目的に活動する「ピースクラブ」の「予科練平和記念館」（茨城県稲敷郡阿見町）見学会が6月25日開かれ、同クラブの子どもたち（小学4年～中学1年生）や保護者、主催するコープぐんま関係者ら18人が参加した。ロシアによるウクライナ侵攻のニュースが連日報道されていることもあり、参加者は霞ヶ浦を間近にのぞむ同記念館で、80年も昔の戦争に思いをはせながら写真や映像、当時の教材、遺品など貴重な史料を熱心に見学。「平和は与えられるものではなく、みんなで守り続けるもの」と語る元予科練飛行練習生、戸張礼記さん(93)の講演には真剣な表情で聞き入っていた。

特攻で失われた命

邑楽町立中野東小四年　飯島りこ

私は、「予科練平和記念館」に行って、戸張礼記さん(93)の話に心をうたれました。例えば、戸張さんの言葉、「生かされている、おおなを大切にし、平和をまもる。自分の生き方を志して、夢の実現に むかって、元気に生きよう」という言葉です。この言葉から、戸張さんの人命の大切さがつうじた気がしました。

私は、人命を大切にしてくれないハードな体験をききました。しかし、今、ウクライナで、戦争によって、毎日のように、なりました。

私は、人命を大切にしてくれないハードな体験をききました。しかし、今、ウクライナで、戦争によって、毎日のようにおこっています。私はおこってはいけないと、今までより強く感じました。

戸張さんは、戦争について、平和とは、なんだろうと、思うようになりました。

戸張さんの話を機会に、ウクライナのことをもっと知りたいと思いました。

戦争を起こすな!!

太田市立沢野中央小5年　大槻航大

戦争体験者の戸張礼記さん(93)は「戦争から時間が経って、戦争の事を当時はとてもきびしくて「吊りゆか訓練」や「ハンモック」をつけるできごとおっしゃっていました。それと同時に、予科練をハンモックを知っている人が少ないことです。こそたらしいです。その理由は昔は学校で予科練を必ず習っていたらしいです。ですが最近は予科練を習う学校が少なくなってきたからです。そして、その当時は「ちりの高さから水に飛び込むことがある」と聞いてかわいそうだと思いました。

そして、まだまだきびしいことはあり、その当時は「ちりの高さから水に飛び込むことがある」とおっしゃっていました。

そして、まだまだきびしいことはあり、その当時は「ちりの高さから水に飛び込むことがある」と聞いてかわいそうだと思いました。

戸張さんの話で心に残ったことは、戦争中は子供たちがきびしい生活をしていたことです。そもたいへんでぼくにはできないと思いました。

時間は1分で、それ以上かかるとぼうでけられる」とおっしゃっていました。

特攻の非心さ

太田市立西中学校　一年　野原優里香

特攻隊とは、戦うための準備をするところです。予科練の卒業生が最初の特攻隊になり、卒業生は「みなさん…さようなら…」と言って戦艦にぶつかって亡くなってしまった。

亡くなってしまった卒業生も約2,800人という多くの人がたくさんの人が「特攻」で亡くなっています。私がもし卒業生だったら死ぬことができないと思います。

みんな10代後半から20代前半の夢もあり希望もたくさんあって結婚もしたかったと思います。それがとても心残りだったのかなと思います。予科練では時には先ばい達から太い棒でおしりにたたかれて泣く痛さだったそうです。絶対にそんなことはしてほしくないと思いました。

平和を守るために

高崎市立高浜小学校　5年　櫻井壮月

今回は、予科練だった戸張礼記さん(93)に話しを聞いた。

礼記さんは「バッター」について教えてくれた。バッターとは、木のぼうでおしりをたたくものだ。例えば、一万れマラソンのときに、一人でもダウンすると総員バッターだ。バットには「海軍精神注入棒」と書かれている。

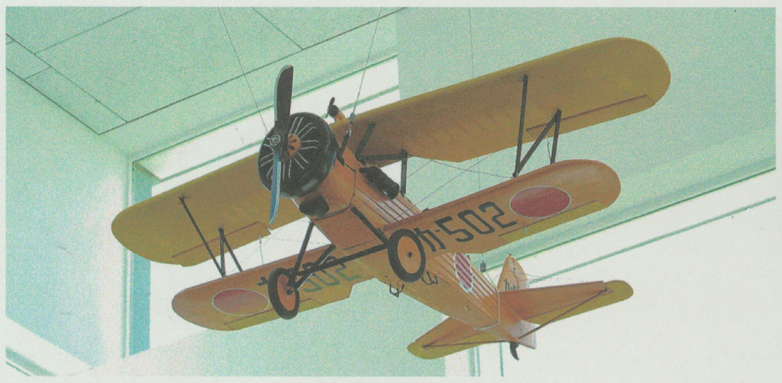
次に礼記さんは「人間は2度死ぬ」と言っていた。1つ目は、ゆずれさらいたときで、「先に飛んだ先ばいを2度死なせないで」と言っていた。

そして、礼記さんは「平和を守ることは」についても教えてくれた。

平和を守るとは、「戦争は止めさせてみんなで和やかに命の安全・安心をまもること。平和は与えられるものではない。自らまもり続けるものである」と語っている。

それに「予科練を知らない人は多いそうだ。理由は六つある。1つ目は、知らない人が多いからだ。2つ目は学校で教えないからだ。3つ目はテスト・受験に出ないからだ。4つ目はそもそも戦争について勉強しないからだ。5つ目は、戦争を体験していない子供たくさんいるから、最後の六つ目は、体験者が語らないからだ。以上のような理由で予科練を知らない人が多いからだ。

だからぼくは、子供の知らない大人の語らない戦争のことについてもっと知りたいと思った。そして今その戦争をしているウクライナは大変だしかわいそうだと思った。そして予科練平和記念館に行って戦争のつらさがわかった。



いろんなこと学んだよ

僕はもう、お母さんの顔を見られなくなるかも知れない。
お母さん、良く顔を見せて下さい。
しかし僕は何んにもカタミを残したくないんです。
十年も二十年も過ぎてからカタミを見てお母さんを泣かせるからです。
お母さん、僕が郡山を去る日、自分の家の上空を飛びます。
それが僕の別れのあいさつです。

ズーム

予科練（よかれん） 海軍飛行予科練習生の略称。第1次世界大戦以降、欧米に遅れまいと、旧海軍が熟練の搭乗員を育てるために1930（昭和5）年に教育を開始。茨城県阿見町には1939（同14）年に横須賀から移転した。14歳半から17歳までの少年を全国から試験で選抜し、搭乗員としての基礎訓練を実施した。終戦までの約15年間で約24万人が入隊し、約2万4千人が飛行練習生課程を経て戦地を赴いた。戦死者は約8割の約1万9千人。神風特攻隊などとして出撃した者も多かった。